

千葉県酪農のさと 嶺岡牧講演会

2017年度 第3回

歴史遺産を活かし地域を元気に！



2018年2月25日(日) 13:30～16:30

千葉県酪農のさと視聴覚室

- | | | |
|-----|---------------------|-------|
| 講演1 | 「地域と歴史遺産～共存共栄」 | 野口 浩史 |
| 講演2 | 「産業遺産のストーリーを行かした観光」 | 小笠原永隆 |
| 講演3 | 「嶺岡牧での交流により地域を元気に！」 | 日暮 晃一 |

ミニ企画展「絵地図にみる嶺岡牧」

会場：第3展示室 元禄時代の絵図をはじめ嶺岡牧が描かれている絵図を展示
(山田区有文書, 石井文書, 川名庄屋家文書, 高梨牧士家文書, 加藤牧士家文書)

地域と歴史遺産～共存共栄

野口 浩史

(公財) 神奈川県公園協会 県立津久井湖城山公園

I. 地域に遺る歴史の意義

昨今、日本は少子化に加えて首都東京など一部都市への人口の流入、地方からの人口流出が顕著になり、その歯止めをかけようと「地方創生」「地域活性化」が叫ばれて久しい。

地域活性化の肝はなにか。私は、「オラが町」を好きになることだと思っている。そしてその醸成に最も適しているのは、その土地に古くから特有に存在し、土地を形作ってきた歴史であろう。実体をもつ遺跡然り、伝統芸能、伝統食などもそれに含まれる。本講座では私が携わっている歴史遺産「津久井城」での取り組みを紹介する。少しでも今後この地域と嶺岡牧の在り方の参考になるものがあれば幸いである。

II. 歴史遺産「津久井城」

津久井城は神奈川県北部に位置する独立峰「城山」とほぼイコールである。山城というタイプのこの城は大規模に山を削り、盛り、作り上げられており、現在にも多くの曲輪(くるわ)、塹堀、堀切などの痕跡を随所に残す。戦国時代、16世紀前半に後北条氏の傘下に入ったと思われる内藤氏が、甲斐との境目の有力支城として治めていた。やがて北条氏が豊臣秀吉に屈する過程で落城した後は江戸幕府の代官が山麓に陣屋を構えて政務を執ることになる。この間、16世紀前半から17世紀中頃までが、城山が地域統括のセンターだった時期といえよう。

III. 津久井城と都市公園

津久井城は現在その範囲が神奈川県立津久

井湖城山公園とほぼ重なり、約100ヘクタールである。津久井湖城山公園が津久井城を軸として作られた公園だからである。公園はダム湖である津久井湖の両岸に「水の苑地」「花の苑地」、そして城山南麓に「根小屋地区」。その他、大部分が山の部分にエリア分けされる。前2エリアは津久井湖の水景、桜、花壇などを楽しむことができ、根小屋地区は歴史と自然が調和した作りとなっている。管理事務所兼展示室等の拠点であるパークセンターは根小屋地区に置かれており、歴史と自然を重視した管理運営がより緻密にできるようになっている。

県立公園の整備は平成5年に都市計画決定がされてから本格的に始まり、平成11年にダム両岸が開園した後に徐々に開園区域を広げているのだが、その手法は稀有といえよう。神奈川県津久井治水センター(旧神奈川県津久井土木事務所)が、津久井城を公園の核とすべく、地名調査、踏査の他、発掘調査まで行っているのだ。そしてそれら調査を含め、津久井城の整備に関することは「津久井城の整備と遺跡に関する調整連絡会」という、行政(県、市町)、公園指定管理者、地元住民代表、郷土史家、自然、歴史に関する専門家を一堂に会し広く意見を集める場において議論されてきた。議論をもとに計画が見直されることも少なくない。

津久井城は非常に価値ある遺跡でありながら国・県はもとより相模原市の指定史跡にもなっていないが、その範囲が公園内にあり整備・管理運営が公になっているため、遺構の保全は担保され、かつ指定史跡以上の価値を

付与することができるのではと考えている。

IV. みんなが面白い遺跡に

津久井城と津久井湖城山公園は、範囲は被るものの、イコールではない。遺跡は主に歴史愛好家が訪れるものだが、公園にはそれを含んだ様々な人が訪れる。毎朝散歩をする人、遊具目当てで来る子供づれの家族、恋人たち、軽登山目的の人、自然愛好家、歴史愛好家(図1)。それぞれがそれぞれの目的で公園を利用しているが、歴史文化資源の利用を促進するにあたって、私はまずいろんな人来てもらうということを第一義に据えている。公園はそれにうってつけの施設であり、それぞれの利用形態の中にひとつでも歴史文化資源への興味の芽を植えられれば、そこから興味を広げてくれるのではないだろうか。

津久井湖城山公園では歴史文化資源への興

味レベルに応じたプログラムを提供するようにこころがけている。野外コンサートや公園祭り、自然観察会等は、遺跡に来て、触れてもらうきっかけづくりである。特に子どもたち、親子連れに向けて提供するようこころがけている。また、マニア向けのガイドや歴史講座、展示等で歴史好きの興味が離れないようにしていくことも重要と考えている。より多くの人たちに歴史遺産を知ってもらうこと、楽しんでもらうことがその利活用となり、ひいてはその歴史文化資源の保全に繋がってくるものではないだろうか。

公園に多様な人たちが訪れるということは前述したが、歴史資源を軸に据えた管理運営をしていると、歴史文化資源に関心をもつ人たちが集まって来ることもある。甲冑コスプレ劇に興味を持つ「津久井衆甲冑隊」、狼煙を上げる「串川狼煙衆」などである。彼らは若

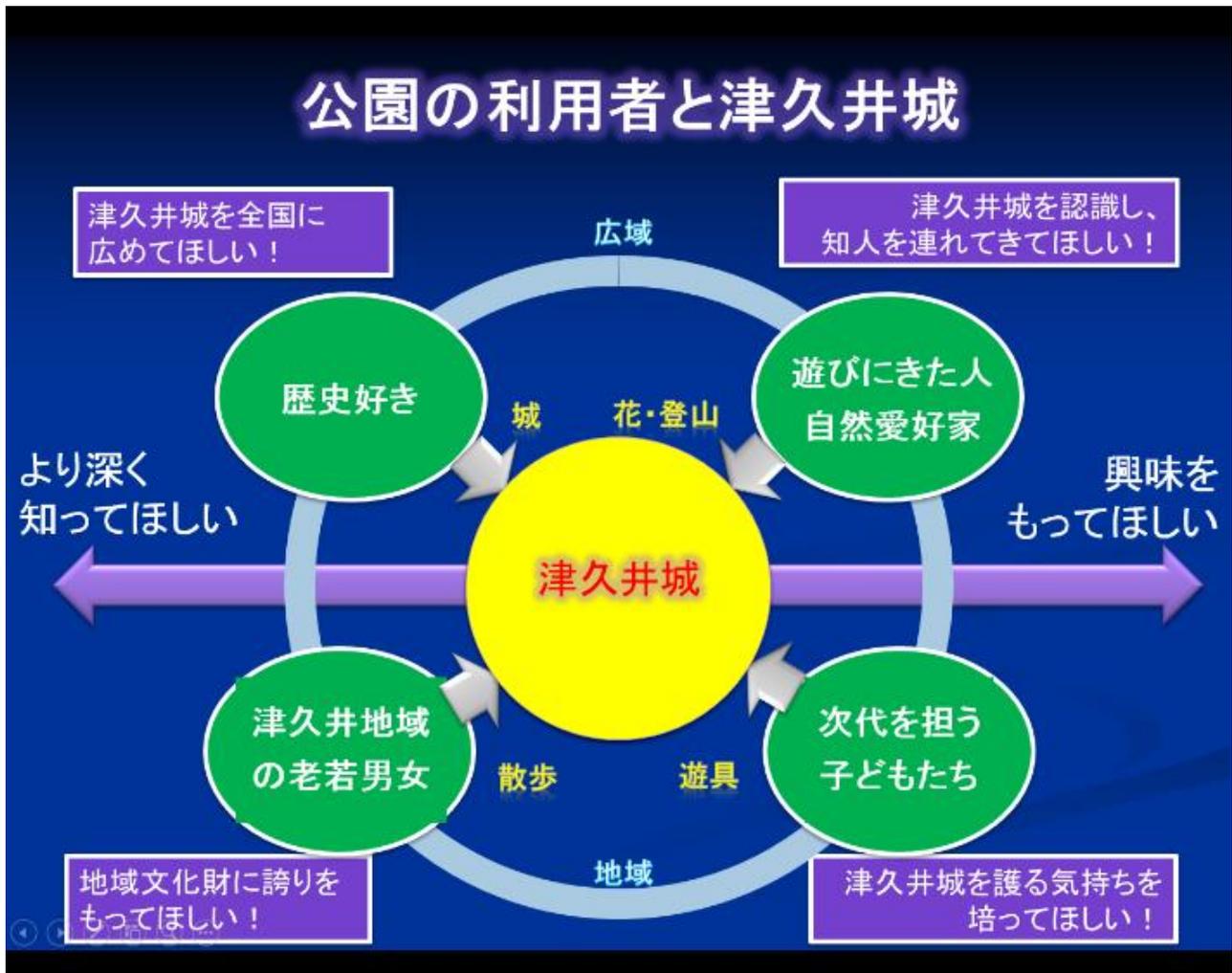


図1 公園の利用者と津久井城の関係

くさまざまなアイデアやツールをもっており、津久井城の普及に努めてくれている。彼らとの協力体制は、非常に大きな力となっている。それは個人のボランティアに関しても同じで、当公園ではボランティアをSKT(助っ人)と呼び、S=好き、K=興味がある、T=得意、なことを公園と一緒にして遂行してくれる方々と位置付け、半組織化している(図2)。また、相模原市文化財保護課が中心となって行っている「津久井城市民調査グループ」による発掘調査も面白い。市文化財保護課と市立博物館、公園の指定管理者である神奈川県公園協会が協力体制を組み、それぞれのボランティアで津久井城発掘調査に興味がある方々とともに調査を行っている(図3)。市民に公開されたオープンな発掘調査を行うことで、三者が相互に利を得ている。

上記はまだ途上の取り組みも多いが、多くの方が面白い歴史遺産にしていくことができれば、おのずと利用は促進されていくと考えている。

V. 歴史遺産は広がる

津久井城の普及は、その範囲である公園のみでとどまるべきものではない。地域に根差した歴史遺産であるからこそ、地域全体で盛り上げていかねば、ただの観光スポットとな

ってしまう懸念がある。地元の商工会は「津久井城ブランド品」を立ち上げた。地域の商工業者が酒や醤油、うどんなどを開発し、現在は29品が登録されている。商工会は彼らが商品開発をしやすいうよう、津久井城や戦国時代の勉強会をしたり、他の山城に視察に行ったりして研鑽を積むようになった。商品開発だけでなくこの姿勢こそが、歴史遺産が地域に根付いていくにあたり、重要であろう。また、相模原市は「北条五代を大河ドラマに」をスローガンに掲げた北条五代推進協議会に参画するようになり、昨年は全国規模の展示会『お城 EXPO』に出展している。

津久井城は往時、地域の政治経済の中心地であり、戦時は領民をかくまって保護する役割も担っていた。そのような意識を現代にも応用し、地元の人達が歴史遺産津久井城をまちづくりの核とし、winwinな関係、共存共栄ができるような管理運営を、公園は目指している。

【文献】

守屋浩之他(2014)津久井湖城山公園ガイドブック 津久井城ものがたりー過去から未来へー

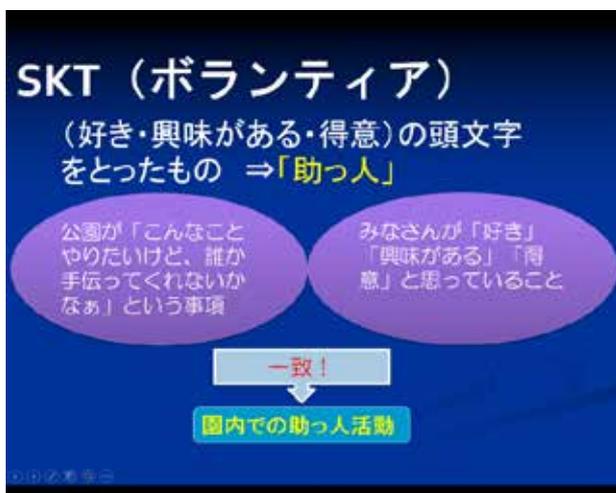


図2 SKT(助っ人)ボランティア



図3 津久井城市民協働調査



城山（津久井城）



公園整備と遺跡に関する調整連絡会



城攻めをモチーフにした遊具



公園祭りのボランティア



津久井衆甲冑隊



津久井城ブランド

産業遺跡のストーリーを活かした観光

小笠原 永隆

帝京大学経済学部観光経営学科

I. はじめに

近年の観光は、いわゆる大手旅行会社が団体客を集めて観光地に送客する「マス・ツーリズム」から地域が主体となって実施する「着地型」のものへ変化している。この主な要因は、消費者志向の多様化が大きく影響している。多人数で同じところに行き、同じところに泊まり、同じものを食べる、という一昔前までは当たり前の団体旅行形態が今や風前の灯火となっていることは明らかであろう。自分の趣味に合ったところに、個人もしくは同じ志向を持つ少人数で行動することが当たり前となっている。IT環境の発展もこの変化に拍車をかけ、自ら情報を収集し、交通や宿の手配を行うようになり、旅行代理店の窓口は次々と統合・閉鎖されている。

このような変化は、受け入れ側である観光地の変化ももたらした。大手旅行会社の意向に沿うことで送客が保証されていた形態が崩壊し、他とは違う特色を出す＝差別化を図るという自助努力が必須となったのである。これは宿泊業、飲食業、施設といった単体だけではなく、地域全体という複合体にも当てはまる。つまり、地域間競争がし烈となることで、今後は特色ある地域づくりが求められていると思われる。

II. 「着地型旅行」について

着地型旅行を推進する際、地域の資源を見出して、整理し、商品として形にしていくことはいまさら言うまでもないだろう。ここで重要なのは、「本物志向」であることと、地域全体が豊かになる＝地域づくりに貢献するも

のでなければならないことであるとする。

まず、「本物志向」であるが、その資源について徹底的に調査研究を行う必要がある。多様化する消費者の旅行志向は同時に「本物」を求める志向でもある。いわゆるオタクを引き合いに出すまでもなく、趣味に多くの時間と費用をかける傾向が顕著となり、対象となるものに対しては研究者顔負けの知識を持つ一般人も多くなっている。それほどでなくても、各地の同種資源を見聞することで、「本物」とそうでないものの区別は容易につくようになっていく。ここでいう「そうでないもの」とは、上辺だけの知識で体験などを売りにする旅行商品を作り、その場を取り繕うとすることなどを指す。商品を作る場合は、その資源に対して蓄積した知識のほんの一部分、すなわち氷山の一角だけを見せ、大部分の蓄積は使用せず水面下にあえて隠しておくことが肝要である。水面下があるからこそ、厚みのある一角が形成可能となるのであり、「本物」商品を作ることが可能となる。話がやや異なるが、伝統工芸の体験においては熟練した職人に直接指導を受けた時の感動の方が、経験が少しあるインストラクターに習うよりもはるかに高いことと同じである（もちろん教え方の上手下手により、左右されるのだか）。

次に地域づくりに貢献する、という点であるが、逆に言うと「観光」というものは、持続可能な地域づくりを行う上でのツールの一つである、ということに他ならない。すなわち、地域資源についてできるだけ調査研究を実施し、地域が地域として持続していくためにどのような活用が可能か、ということに徹

底的に検討することを通じて「着地型旅行商品」を造成していくということになる。

Ⅲ. 産業観光と地域

着地型旅行商品は、様々なジャンルの地域資源を活用することにより、その造成の幅は大きく広がる。その中の一つの方向性として、「産業観光」といわれるものがある。この明確な定義を示すことは難しいが、言葉が示す通り、地域に根ざしている（あるいはかつて根ざしていた）産業をテーマにした観光の仕組みづくりを行うこととなる。大きな特徴としては、地域が地域として成り立つための経済活動と密接であり、そこに観光という要素を加えることにより、経済の活性化（あるいは再生）が期待できるという点がある。

産業といわれるもの自体が対象となることは、これまでの観光にはあまり見られなかったが、先述したように「多様化」の流れの中で「本物」の「体験」が求められるようになり、いわゆる農林漁業をはじめとして、伝統工芸や地場産業などへ寄せられる期待が大きくなってきたと言える。また、受入れ側にとっても、経済構造の変化に対応するために大きなメリットが生じる。

特に地域における第二次産業を中心として、大なり小なり「問屋」が媒介する流通制度により、長年にわたって安定した生産が約束されていた。だが、その崩壊により大きく衰退し、残った生産者も形態の変化を迫られることとなった。「問屋」の言う通り生産品を納めていけばよいシステムは一気になくなり、自らが市場を開拓し、売り込んでいかねばならなくなったのである。ここに本物志向の体験をはじめとする観光交流を実施することで、新たな購買層を獲得できるだけでなく、口コミによる宣伝効果も期待できるようになった。

ここで注意すべき点は、「なぜこの場所で、この産業が」という来訪者の素朴な疑問への対応である。すなわち、地域が地域として成

り立たせていた産業のストーリーが必要である、ということになる。第一次産業を含むすべての地域産業に当てはなるが、単なる時系列の羅列によるものだけでなく、経済、技術や一見かかわりのないことと思われる出来事などとの関係性を加味し、多種多様な物語を用意することで、来訪者の満足度を高めることができるだけでなく、何度も足を運ぶ必要性が生じる多層的な「観光」を実現することができると思われるからである。もちろん、そのためには徹底した調査研究という土台が必要となるは、先の述べた通りである。

Ⅳ. 産業遺跡の活用と嶺岡牧

嶺岡牧には、様々な遺跡が非常に多く存在することが、これまでの調査研究で明らかとなっている¹⁾。その一つ一つが嶺岡牧を育んできた地域個性を示すものであり、様々なストーリーの構築が可能である。「牧」を大テーマに置くと、全体の歴史物語もあれば、その構造、経営実態、食、信仰、整備の仕組み、支えた村人の暮らし等々、大小の物語が無限に出てくる。それに関連する体験（現地見学を含む）を組み合わせることで、着地型旅行商品の造成可能性も大きく広がると思われる。

現地においては、牧を中心に人々の暮らしを支えた経済構造は消滅し、その痕跡＝遺跡やわずかに残る酪農が残るのみである。地域全体を見ても人口減少に歯止めがかからない状況であり、地域が持続するための対策が急務といえる。観光というツールがすべてを解決するとはもちろん言い難い。しかし、「牧」「酪農」といった産業遺跡ストーリーを構築し、着地型旅行商品を造成していくことで、「暮らし再生」の一助となることが期待できるのではないだろうか。

【文献】

日暮晃(2017)嶺岡牧が地域経済活発にした、シンポジウム嶺岡牧の姿に迫る 要旨, pp. 1-8.

嶺岡牧での交流により地域を元気に！

日 暮 晃 一

わくわくどきどき過ごして

I. 地域の存続には交流が不可欠

近代社会となり、職場がある都市部に人口が集まり、村落は人が流出した。地方の商店は閉められ、小中学校が廃校となり、公民館や郵便局が減るなど、社会資本が地域での暮らしが困難なまでに失われ、ついには住人が誰もいなくなって山に戻るといった「村が消える」現象が一般化した。さらに、都市化が早くから進んでいた大都市の中心部、さらには開発が早くに行われた「ニュータウン」などで高齢化が進み、人口が激減するという空洞化現象が展開するようになった。近年は、政治機能・本社機能は都市中心部に残るものの、居住の場であり人々が活発に活動する場は都市外周部に移った。一方、地方の村落は衰退が加速され、住むところと住めないところの境で有る限界地が、そしてアネクメーネが広がり、20年以内に自治体として成り立たなくなることが見込まれる消滅自治体が問題となっている(図1)。嶺岡地域も、首都圏に有りながら地域社会崩壊に向かって急速に進んできている。

地域の人口が減少し、村落コミュニティが地域を管理することが難しくなっている。



図1 近代における地域社会の変動運動

海岸に作った砂の城は、放置すると雨風や波で崩れ、ついには痕跡さえ無くなる。こうした現象をエントロピーの増大という。社会も同様に外部から維持のための活動を続けないと社会が崩れ、ついには消滅する。すなわち、社会エントロピーの増大が生じるのである。

全ての生き物が、個体を維持して行くには食物を食べるなど外部から必要なものを取り入れていかなければならない。一切外部から遮断して飲まず食わずにいると死に、体は腐り、やがて溶けて存在していた痕跡すら無くなる。社会も同様に、外部から流入し、それを内部化することにより初めてその社会を維持することが可能となる(図2)。



図2 エントロピー増大とらず個体を維持する方法

社会エントロピーが増大すると、外部から流入する人を内部化する力が失われ、地域在住者を自動的に自治会構成員として取り入れることを止め、「よそ者に口を出させない」として排除するようになる。こうした、外から遮断して自己内部に閉じこもることは、村落コミュニティを維持するかのような錯覚に陥るが、より人口が減り、消滅自治体化の促進となる。このことは、交流で相互に内部化することが地域維持には必須であることを示している。そこでここでは、嶺岡牧を活かし持続的地域再生となる交流の方法を検討する。

Ⅱ. 地域を食い潰す観光から将来の暮らしづくりとなる共生共鳴型交流へ

交流の一つとして「観光」がある。発展途上国の経済発展により 1980 年代から日本に買い物などで訪れる旅行者が増えたことから、国際観光による経済発展が国の政策として推進されるようになった。さらに、東京オリンピック 2020 がスポーツのオリンピックであると同時に文化のオリンピックとして位置づけられたことから、日本遺産など文化観光が国是となり、制度・事業とも著しい展開を見せている。しかしここでは、“実現しようとしている観光とは何か”、“何を目標とする行為なのか”という議論が捨象されており、観光でどのような将来を招こうとしているのかを読み取ることができない。強いていうなら、“国際観光により外貨を稼ぎ国民所得を高める”という 1955 年から 1973 年のオイルショックまで続いた高度経済成長期における社会開発目標の変形といえよう。

だが、「観光」に対する目的や行為は、時代によって変化している。巡礼に始まり社員旅行などのマスツーリズムに至る観光は、日常の憂さ晴らしであり、リセットとしての「観光」であった。しかし、1950 年代から欧米では週末になると決まった農村に行き農作業や農村生活を暮らしづくりとして行う、「もう一つの日常生活」を行うオルタナティブツーリズムツーリズムが広がり、今や主流の交流スタイルとなった。これらを、観光という概念で一括りにすることさえ難しい。日本でも、徐々に旧来型の観光、とりわけマスツーリズムが敬遠されるようになり、グリーンツーリズム法と呼ばれる「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」が 1994 年に、「エコツーリズム推進法」が 2007 年に制定された。また、小中学校の修学旅行が鴨川農家民泊に宿泊して農業・農家暮らし体験を行う旅行に変わるなど、旧来型観光からオルタナティブツーリズムへの移行が着実に進んでいる（図 3）。

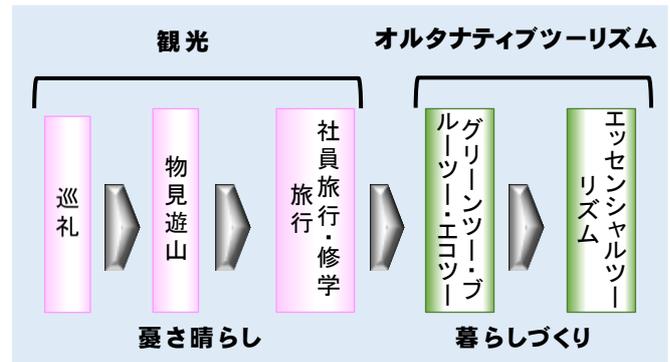


図3 観光からエッセンシャルツーリズムへの変化

現在は、“農業の体験”とか、“環境体験”といった一つの目的・行動に特化したツーリズムでは無く、風土に育まれた生活様式、すなわち文化を総合的に体験するとともに、異なるコミュニティの一員として社会を担い、相互の暮らし開発のエネルギーの高まりを目指した二地域居住型・総合型・共生共鳴型交流であるエッセンシャルツーリズムへと変化している。

こうした、観光からエッセンシャルツーリズムの変化を整理すると、図の4のようになる。「どのような日なのか」：スケジュール軸、「どのような行為か」：行為軸、「何を入手するのか」：入手目的軸、の3軸で見ると、旧来の観光は、余暇の活動として名所旧跡等を観て歩き土産品を観光旅行に行った証として購入する、日常の憂さ晴らしに過ぎない。一方、エッセンシャルタイプツーリズムは旧来型観光と逆で、もう一つの日常として農村等の暮らしを体験し、暮らしづくりとすることが生きる目標となっている。

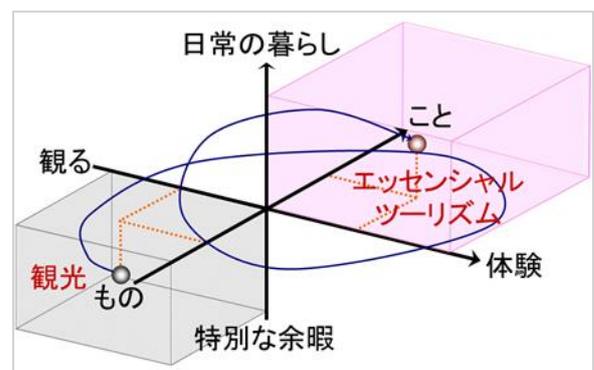


図4 旧来型観光のエッセンシャルツーリズムの相違

資料：日暮(2007)pp.12-32

Ⅲ. 嶺岡牧ストーリー「皆を元気に！」

大きな歴史は原動力技術の発展により起きている。古代奴隷制の原動力は人の労働そのものであった。牛耕・馬耕の開発による古代農業革命で、労働する人では無く土地を持つことが富の原点である封建制社会をつくりだした。そして、蒸気機関や電気などの発明により産業革命が進展し、資本制社会をもたらした。そうした意味で、鋤を牽いたり運搬作業を行う牛馬を繁殖する牧は、原動力生産基地として前近代社会に不可欠な土地利用であった。牧を軍馬生産地と評価することが多い。しかしこれは、近世末期以外は該当しない理解と言える。ごく僅かな領主層の馬を除き、殆どの馬は農耕や山仕事に用いられ、戦時に徴用されて軍馬となった。このように戦時に用いる軍馬は存在した。しかし近世末まで、今日考えるような、軍事に利用を限定した軍馬という概念は存在しなかったのである。このことは、江戸幕府直轄牧で生産された馬も上げ馬は1割にも満たず、その殆どが農耕馬等に売却されていることでも分かる。原動力生産基地という牧の基本的な性格から、近代社会になると牧の役割は終わり、廃止された。しかし嶺岡牧は、八代将軍徳川吉宗が1728（享保 13）年に嶺岡牧で酪農を開始し、産業の牧となったことから、近代社会となっても引き続き牧として利用された稀有な牧である。このことが、嶺岡牧を他の牧と分ける根本的な違いとなっている。

嶺岡牧特有の個性をつくりだした原点は、八代将軍徳川吉宗が「国民の寿命を延ばしたい」と幕府の医学書を貸与して医師の育成、小石川薬園の増設、小石川養生所の開設という文脈で、涅槃経に記されている最高の薬餌と考えられていた乳製品の「醍醐」を生産し普及するため嶺岡牧で酪農を始めたことにある（図5）。十一代将軍徳川家斉の桃井寅に命じて書かせた『白牛酪考』によると、徳川吉宗は働かされて疲労している役牛の乳で「醍醐」を製造するのでは



図5 涅槃経に記された牛乳から醍醐の生産

無く、インドでみられるようなゆったりと暮らしている白牛から搾乳した牛乳を用いた方が良質と考え、白牛を各地に求め、美作で飼養されていた3頭の白牛を嶺岡牧に放して原料乳の確保を図ったことが記されている（図6）。醍醐生産は九代将軍となった徳川家重、そして田安家へと引き継がれた。徳川家斉は徳川吉宗の意向を重視し、醍醐の普及を図った。徳川家斉の命を受けた石見守岩本正倫は白牛酪の名に変えて市販し、広範な普及を推進した。

野馬方役所で白牛酪を製造したので、嶺岡牧の白牛が出産すると搾乳のため牧士宅から江戸まで白牛母子を輸送した（図7）。



図6 醍醐の生産を開始した徳川吉宗と白牛酪として市販を推進した徳川家斉の肖像及び白牛酪考

資料：<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%B3%E5%B7%9D%E5%90%89%E5%AE%97>
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%B3%E5%B7%9D%E5%AE%B6%E6%96%89>

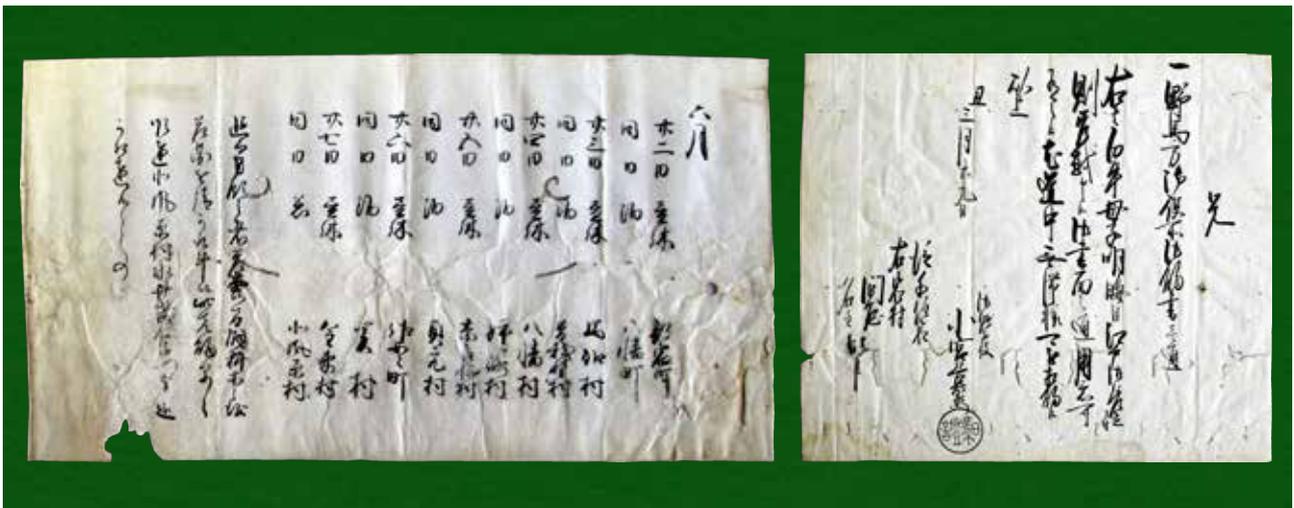


図7 江戸の野馬方役所と牧士宅間の白牛母子輸送の触書

注：千葉県嶺岡乳牛研究所所蔵

明治維新で江戸幕府直轄牧は閉鎖されたが、嶺岡牧は地域住民が出資して日本初の地域畜産会社である株式会社嶺岡牧社を 1879 (明治 12) 年に発足し、大蔵省から嶺岡牧の土地を借り受けて馬及び乳牛の繁殖・育成を行った。嶺岡牧社は 1884 (明治 17) 年に解散されたが、1889 (明治 22) 年に乳牛の繁殖・育成を中心とする嶺岡畜産株式会社が設立された。維新政府は、富国強兵政策を推し進めたが、それには国民を欧米並みの体力・体格にすることが国是となった。明治政府は、それを肉食と牛乳・乳製品食で実現することを図った。江戸時代から嶺岡地域の農民は酪農のノウハウを蓄積していたことから、嶺岡畜産株式会社が生産した乳牛と酪農のノウハウを持った農業従事者を移出することにより、飲用乳を生産する都市酪農と北海道など加工原料乳を生産する酪農地域づくりを実現した。

嶺岡畜産株式会社では、乳牛頭数が最も多い時は 1000 頭に達した。ここで搾乳された

生乳を腐敗・品質劣化をさせずに乳製品を供給するため、煉乳工場が建ち並んだ。品質維持の技術が容易でなかったことがネックとなり経営は困難を極め、開業しても短い時間で廃業する工場が殆どであった。しかしこのことにより嶺岡地域が森永乳業、明治乳業など主要製乳企業の誕生地となったことに繋がった。

株式会社和光堂では大正時代から乳児死亡率をゼロにしたいと乳児用粉ミルクの開発し、1927 (昭和 2) 年に極東煉乳株式会社南三原工場を買収し、房総で乳児用粉ミルク製造を始め、1929 (昭和 4 年) に東洋一といわれた設備の工場を新設し、乳児用粉ミルクを一手に生産した。明治乳業も当地で乳児用粉ミルク生産を行った。

戦後、栄養改善・食生活改善が国の目標に掲げられ、牛乳・乳製品の喫食が進められたが、酪農の先進地域である安房酪農地域が日本一の飲用乳供給地帯となった。

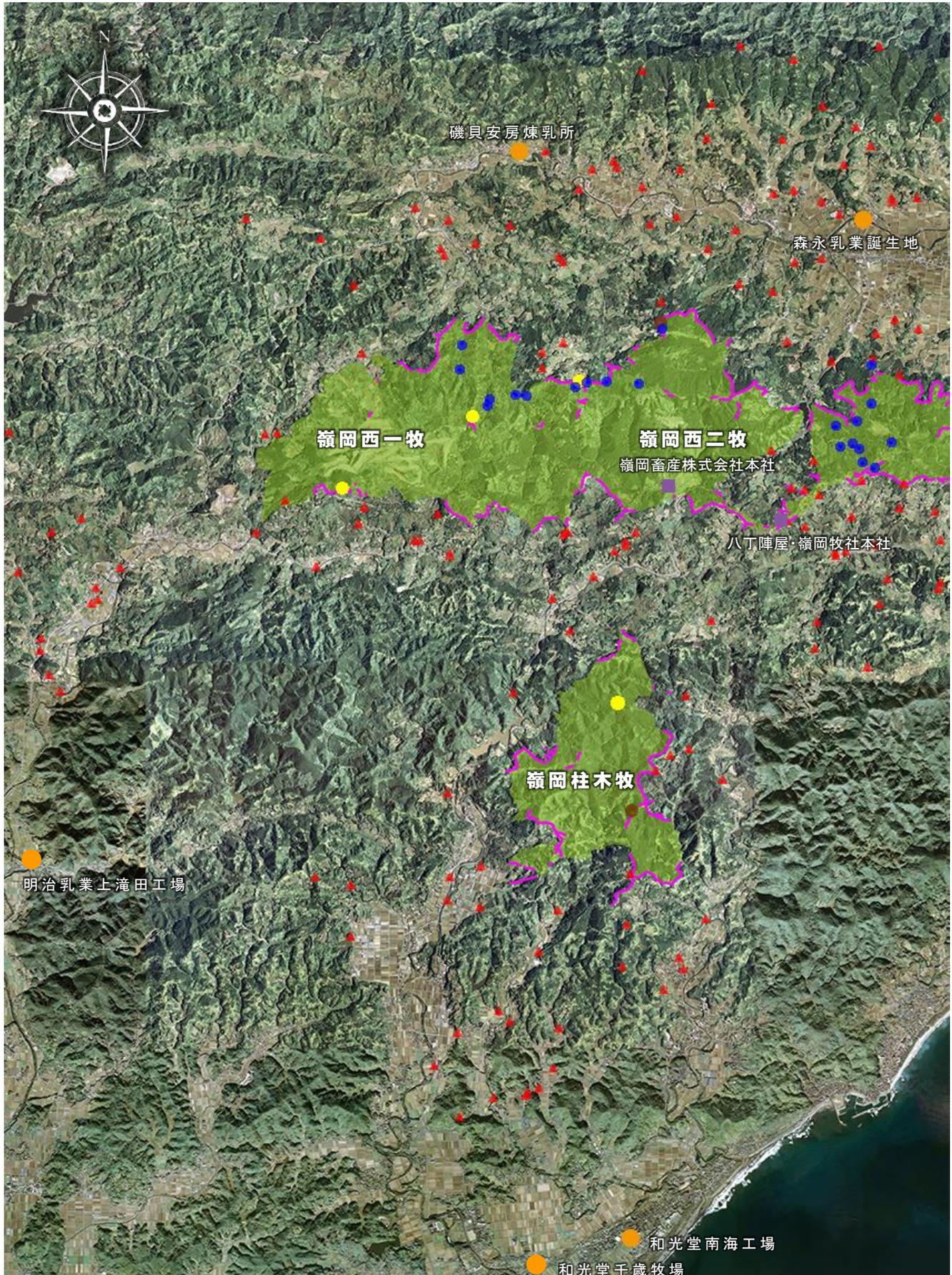
以上の嶺岡牧ストーリー：「皆を元気に！の牧」を整理すると、表 1 の通りである。

表 1 牧経営の目的と生じた産業からみた嶺岡牧の個性

	江戸時代	明治時代	大正時代	昭和前期	昭和後期
目的	国民の寿命を延ばしたい	体力・体格を欧米並みに		乳児死亡率をゼロに	栄養改善・食生活改善
産業	日本酪農発祥之地	日本における地域畜産会社の誕生地 乳牛の供給基地	主要製乳企業の誕生地	日本における乳児用粉ミルクの生産拠点	安房酪農地域の形成

IV. 嶺岡牧ストーリーを体感できる交流

嶺岡牧は、首都圏に有りながら奇跡的に江戸幕府直轄牧の全貌が残されている牧である。放牧地を囲う野馬土手、木戸、牛馬の水飲み場、仮囲、畜舎や管理者の宿舎、茶屋、八丁



陣屋、馬場、牛馬の火葬場・墓地、古道や関所、磯貝安房煉乳所等黎明期の製乳工場、森永乳業及び明治乳業の誕生地、和光堂南海工場・千

歳牧場と関連施設、集乳所、馬頭観音、牛の安産を祈願した社寺など、極めて多数の嶺岡牧関連遺構が良好に残っている(図8)。



図8 “皆を元気に！の牧”を示す歴史遺産の分布

これらを、一体的に整備していくことで嶺岡牧ストーリーを体感できるステージとなる。穏やかな山容の嶺岡山一面が草原で、裾には田園地帯が広がり、その向こうに海が望める開放的な空間が嶺岡牧の景観である。このステージの上で、“皆を元気に！”の牧で暮らしづくりとなる共生・共鳴型交流を展開することが課題となる。牛乳・乳製品の喫食，そのための酪農を中心とした共生共鳴型交流の場である「“皆を元気に！”の牧」を整理すると，図9のようになる。

嶺岡牧は乳製品である「白牛酪」を食べ，暮らしづくりにとって大きな条件である健康の維持・増進を図ったことが基盤となっている。そこで千葉県酪農のさとはでは，これまでに嶺岡白牛酪づくり体験（図10），チッコカタメターノ料理づくり体験（図11）を行ってきた。これら，食物づくり体験で終わらせず，藍を育てて藍染めを行いランチョンマットをつくるなど食具・食器づくり体験，野点



図10 嶺岡白牛酪づくりとそれを茶菓子とする野点体験



図11 チッコカタメターノ料理教室

で自分達がつくった嶺岡白牛酪を食べる体験や，チッコカタメターノ料理を基本に本膳様式の膳揃いをし(図12)，お手軽食から脱して食生活を楽しむ大切にする食習慣づくりまで，食生活様式一体の暮らしづくりを図ってきた(牛村 2014, 2017)。

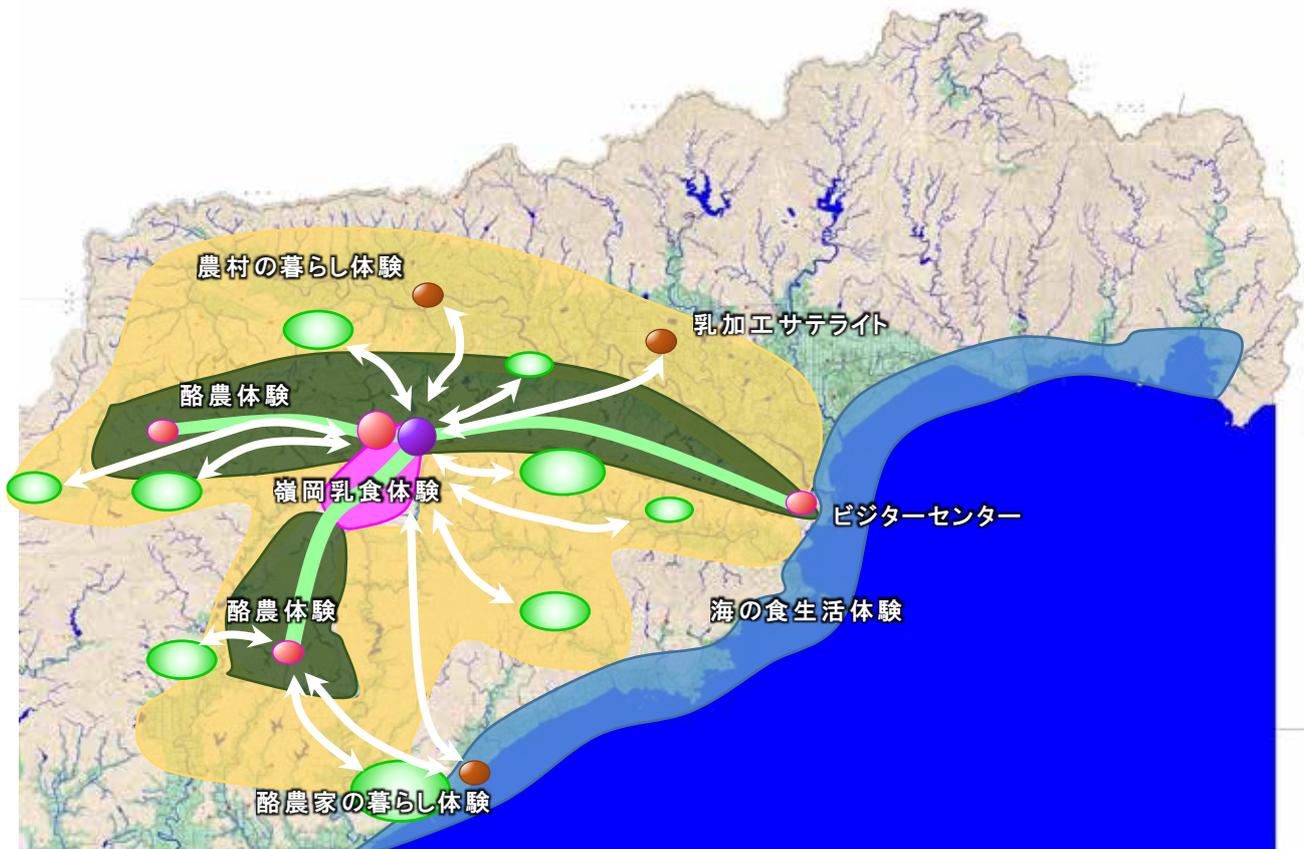


図9 牛乳・乳製品の喫食及び酪農を中心とした共生共鳴型交流の場である「“皆を元気に！”の牧」



図 12 チッコカタメターノ料理教室でつくった
房総の海と山のコラボ膳

チッコカタメターノ料理教室では、食文化の全構造に及ぶ暮らしづくりの見直しを企図するとともに、地域の食材を基本に膳構成し、ロカボアーズを実現するローカルフードシステムの構築となる運動とした。チッコカタメターノは、鴨川市で 2009 年から 2010 年に行った鴨川の食生活づくりワークショップで“残していきたい鴨川の郷土料理”として合意された「鴨川味の方舟食品」の一品目である。これら房総に残したい食べ物を伝承し、地域食生活づくりとなるプログラムとした。安房地域は牛乳とともに海産物は地域に欠くことができない食材である。したがって、海産物をコラボし、バラエティに富み美味しい食事にする事で、地域個性を活かした「元気」増進を実現する文化コンプレックスを志向した。

牛乳・乳製品、そしてそれを用いた料理や食品は極めて多い。これを体験できる嶺岡乳食体験の場であり、喫食を拡大するモールを整備することを通し、地域の元気を創生する。

嶺岡畜産株式会社では、1000 頭を越える乳牛を飼養した。嶺岡牧の特徴である海が望める広々とした草地での酪農体験は、大きな魅力となる(図 13)。これまでの酪農体験は、酪農家で実施してきた。酪農体験というと給餌体験や搾乳体験となりがちだが、牛舎内の糞尿の掃除、草地の管理作業など、酪農作業の日常を体験できるようにした(図 14)。地域の酪農家と連携し、地域全体が交流・対流の場となることにより、体験ニーズへの充足率を高められる。



図 13 馬飼養体験と一体となった嶺岡牧の酪農体験



図 14 酪農家での酪農体験

嶺岡牧の酪農経営は、周辺の耕作放棄地で飼料作物を栽培するなど、地域で取り組むことで合理的な地域酪農経営が可能となる。また、総合的に農業を行う暮らし、農村での暮らし方を修得するためには、鴨川農家民泊などの農業体験民宿と連携し、体験交流の場としてのシステム整備が必要となる(図 15)。

製乳工場跡等を活用したサテライト、ビジターセンター、それらを繋げる嶺岡牧センター等を整備し、交流を促進することが求められる。



図 15 鴨川農家民泊での農業体験

V. 嶺岡牧での活動を本物で体験できる 現地利用型再生

これまで、歴史遺産の活用というと史跡公園とし、その一角に博物館を建てて展示を行なうか、せいぜい旧来型「観光」の観光スポットとして利用するにとどまっていた。旧来型観光スポットに嵌まったところを除き、その多くは利用による機会費用は低く、史跡公園の草刈り費用さえ捻出するのが困難で、市民から無駄な未利用地空間と認識されてきている。これは、歴史遺産は地域のグランドデザインやコミュニティデザインを描く時の主要要素であるという認識を欠き、ただ単に「残す」ことを目的化していたことに起因する。そのため、いわば死体の臓器をホルマリン浸けで残すような、現状の凍結的保存であり、公園整備により環境と主体活動との相互関係を分断した、歴史にかかわる情報を著しく低減させた保存であり、構成要素を部分的に切り出した展示品をみるだけの分断保存を行っているため、専門的な知的好奇心は充足するが、多くの市民がその魅力に引き込まれ楽しみながら歴史遺産で展開されていた行為を体感で捉えることを拒んでいる。

こうした問題を改善し、歴史事象を体感で捉えられ、そこから歴史事象に潜む環境主体間関係及び主体環境間関係を形成する社会グルーオンの運動を見だし、将来の地域暮らしをつくりだす糧として利用するには、現地で、本来の環境のもと、本物の遺構で、そこで展開していた姿に沿った利用を行う現地利用型再生が基本となる。そして、交流者がその中に入って実際に暮らしを行うことで、理性的知識を越えた適応力の大きい深い理解を得ることができる。嶺岡牧が全貌を残しているのみならず周辺の関連遺構も多数残されているので、歴史遺産の利用型再生による地域再生効果は大きい(図 16)。

VI. 嶺岡牧での交流により地域を元気に！

持続的な住民・交流者相互の暮らし開発と



図 16 嶺岡牧の現地利用型再生のイメージ

活力に富む地域再生にとり、「皆を元気に！」の牧」という個性を持つ嶺岡牧及び関連歴史遺産は巨大な資源といえる。しかし、嶺岡牧及び関連遺産は、現在荒廃林に埋もれ未利用資源に留まっている。この資源化には次が必要である。第1に、嶺岡牧を再生し、安全・安心な飼養様式で放牧型酪農を行う。第2に、独自ミルクプラントを軸とした牛乳・乳製品のローカルフードシステムを確立する。第3に、グローサレントをはじめ牛乳・乳製品の購入・喫食が地域で行えるモールを整備するとともにロカボアーズネットワークを構築する。第4に、地域が体験交流の邑として一貫型体験交流となるシステムを整備する。地域崩壊が進む嶺岡地域において嶺岡牧は、人と地域が元気となるカンフル剤といえる。その利用が急務である。

【文献】

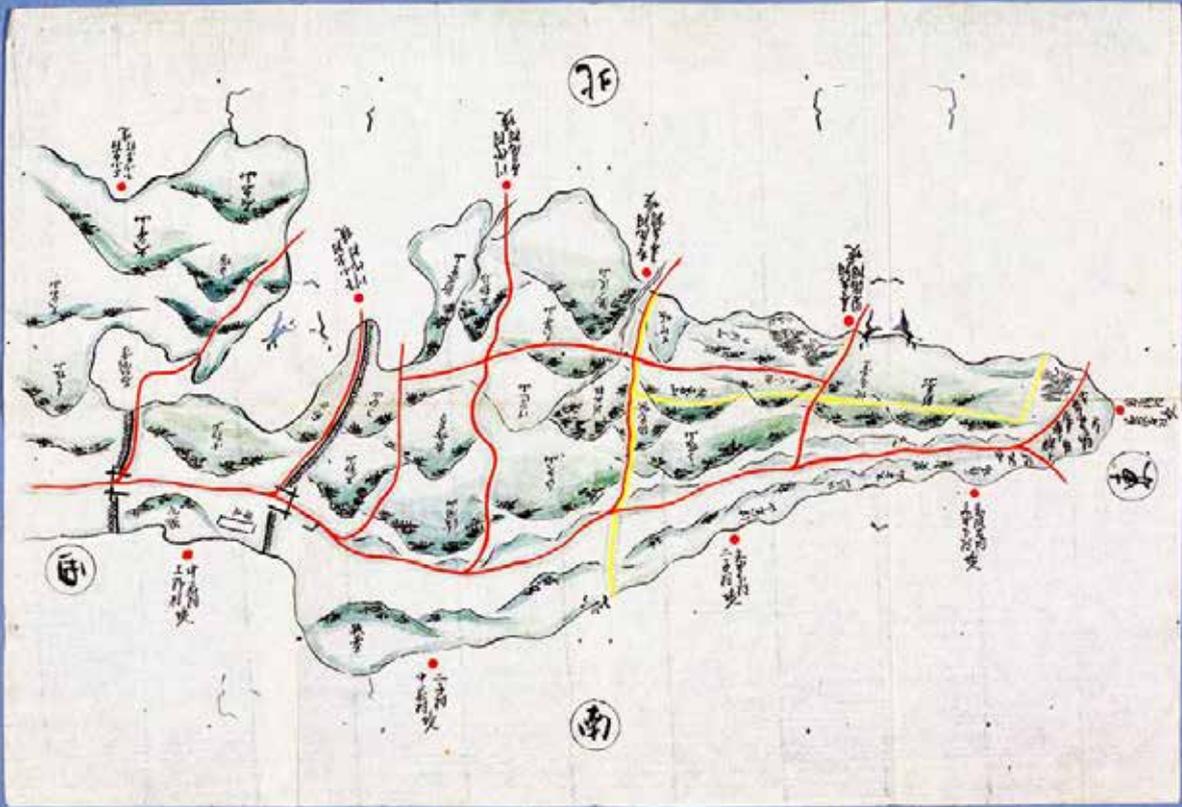
- 日暮晃一(2007)ツーリズムの現状と課題, 糸長浩司・日暮晃一・藤沢直樹・田崎義浩・小澤祥司・藤島祥枝, 鴨川市観光基本計画—鴨川ホリスティックツーリズム—, 鴨川市建設経済部商工観光課, pp.12-32.
- 桃井寅(1792)白牛酪考, 油井むら利兵衛.
- 牛村展子(2014)牧の文化を再生する—歴史遺産を活かした地域再生—, シンポジウム牛乳文化の至宝: 嶺岡牧 要旨, 千葉県酪農のさと・嶺岡牧研究所, pp.39-48.
- 牛村展子(2017)「嶺岡牧再生マネジメント実証」方式, 酪農乳業史研究, (14), pp.23-30.

ミニ特別展

絵地図にみる嶺岡牧の世界



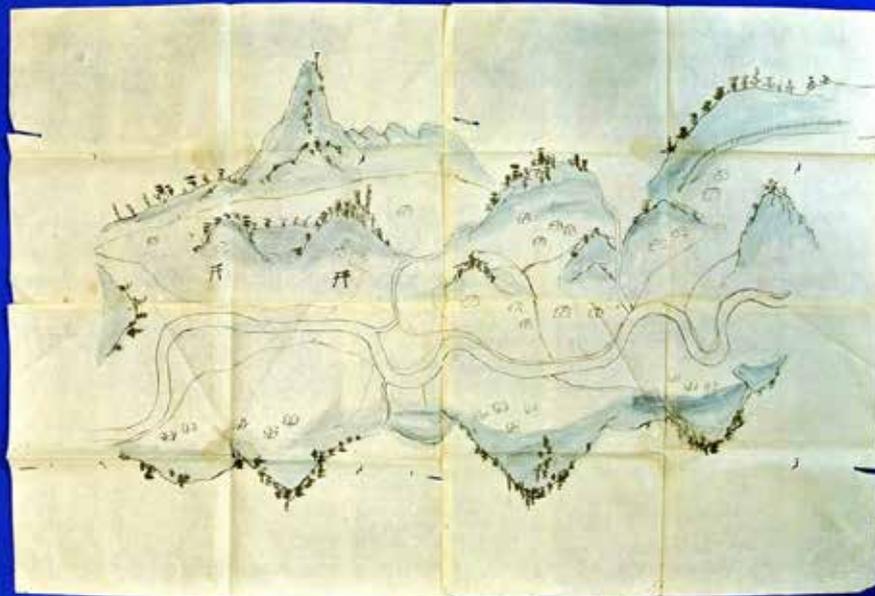
1. 峯岡山附近村境之絵図



江戸時代

嶺岡東下牧を描いた絵図。牧を細分する土手を黄色の線で示している。捕込（馬捕場）の東西を土手で画し，牧を縦断する尾根道のところに木戸があったことが描かれている。御厩石井家文書

2. 平群中村の絵地図



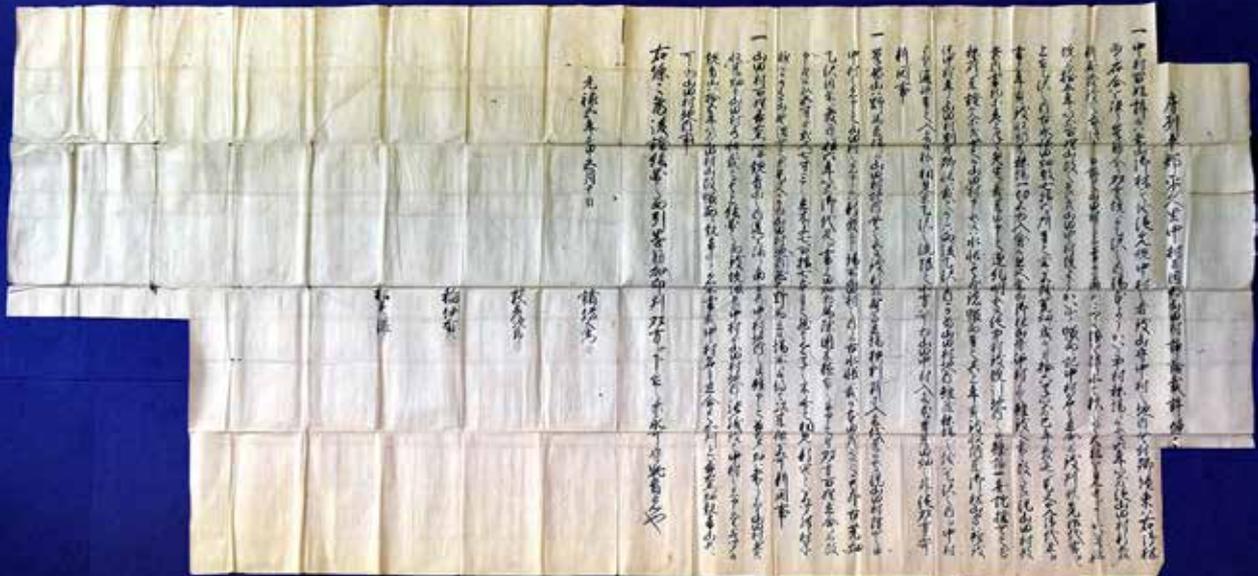
江戸時代末期

平群中村を描いた絵図。糊が剥がれ4枚に分割。いわゆる「宿要害」の山に加藤牧士家の家が描かれている。右上の山が嶺岡牧。山裾に嶺岡牧を囲う土手と柵が描かれている。加藤牧士家文書

3. 諍論御裁許 御裏書 御絵図面(房州平郡平久里中村より同郡山田村諍論裁許 條々)



部分拡大



元禄 5 (1692)年壬申 5 月 10 日

平久里中村と山田村の境界争いの裁定を記した文書。絵地図には嶺岡牧を野馬立馬と表現している。嶺岡牧を描いた最古の絵地図。山田村による嶺岡牧内での開発を戒めている。山田区有文書

4. 荒川村彩色絵図



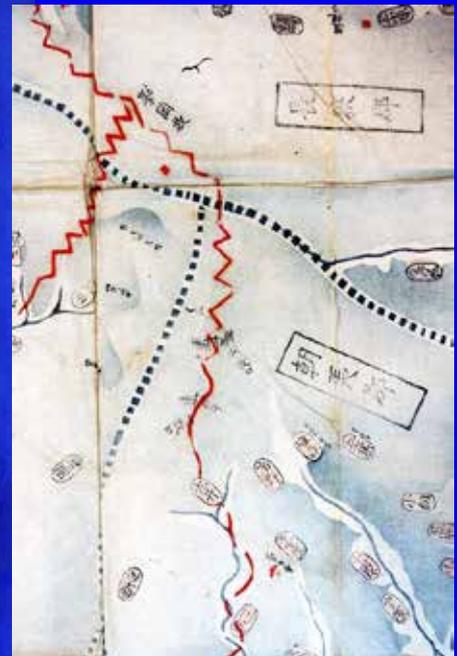
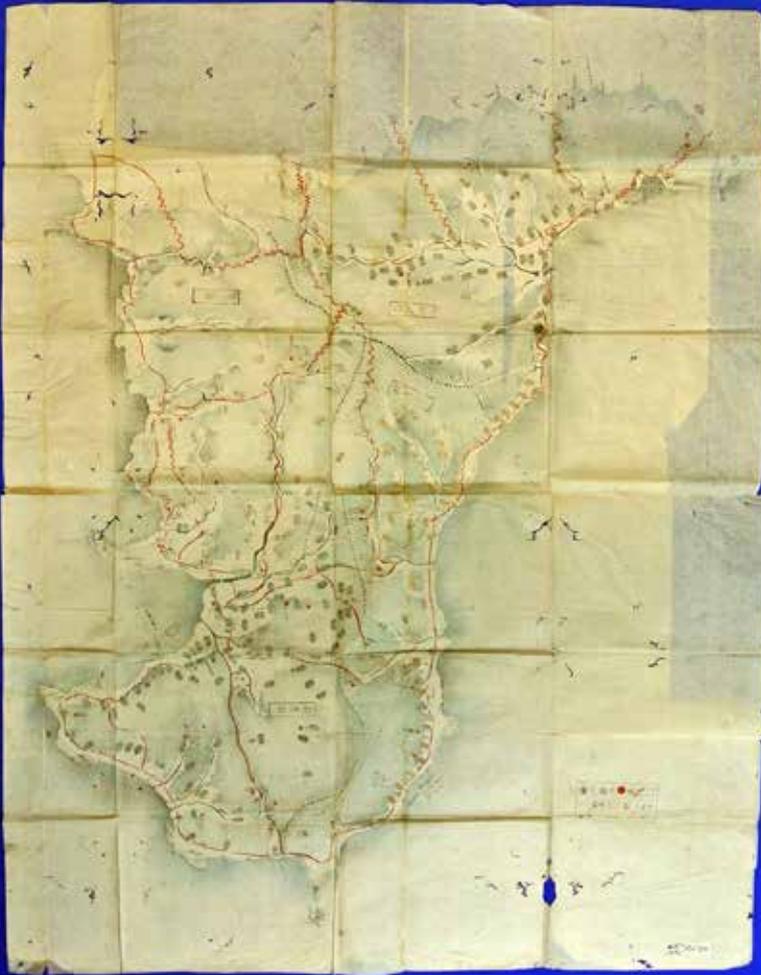
寛政12(1800)年8月
役所の竹垣三右衛門に提出した荒川村の絵図。嶺岡牧の野馬土手が描かれている。
高梨牧士家文書

5. 荒川村彩色絵図



安政5(1859)年4月
役所の佐々木道太郎に提出した荒川村の絵図。嶺岡牧の野馬土手に柵を加えて描かれている。
高梨牧士家文書

6. 木版安房一國彩色絵図



部分拡大

江戸時代
安房國の木版絵地図。長狭郡、朝夷郡、平郡の境部分に「峯岡牧」と記している。房総半島の中央を縦断する道で大井に「一牧口」、「二牧口」の関所が描かれている。安房の幹線道路であったと推定される。
高梨牧士家文書



「房州峯岡山野絵図」1725(享保10)年, 石井孫左衛門扣, 御厩石井家文書



「房州朝夷郡柱木野絵図」江戸時代, 石井孫左衛門扣, 御厩石井家文書



「房州峯岡山野絵図」「房州朝夷郡柱木野絵図」の袋, 御厩石井家文書



千葉県酪農のさと嶺岡牧講演会 2017年度第3回

歴史遺産を活かし地域を元気に！ 要旨

2018年2月25日発行

編集・制作 NPO法人エコロジー・アーキスケープ

発行 千葉県酪農のさと
